学部
大学
治営
明経

は

国語問題

はじめに、これを読みなさい。

1 この問題用紙は12ページある。**ただし、白紙はページ数に含まない。**

2 試験時間は60分である。

3 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合して確認すること。

4 監督者の指示にしたがい、解答用紙の氏名欄に氏名を記入すること。

5 解答は、すべて解答用紙の所定欄にマークするか、または記入すること。所定欄以外のところには何も記入しないこと。解答欄は裏面にもある。

6 問題が指示する数より多くマークしないこと。

7 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもＨＢ・黒)で記入すること。

8 訂正する場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。

9 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。

10 **解答用紙はすべて回収する。**持ち帰らず、必ず提出すること。

11 この問題冊子は、必ず持ち帰ること。

12 解答をマークするときには、記入例を参照すること。

良い例	悪い例
●	◎ ⊗ ○

(マーク記入例)

(一)

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

リズムは世界中の随時、随所に現れる現象であるが、その現れの場所として、特記すべき独特の存在が人間の身体である。身体はそれ自体、生のリズムの一単位にほかならないが、個人の身体はほかに例を見ない求心力に恵まれ、その単位形成の力は抜群の強さを示すからである。それは誕生と死という二つの明確な断絶に前後を挟まれ、種族生命の長い流動のなかで紛れ難い単位をかたちづくる。さらに個人の生涯はその内部にもめだった時間の単位を生みだし、成長、成熟、老衰という段階を踏んだリズムを繰り広げる。

身体は一面で生理学的な肉体と重なりあっていて、他の動物の肉体と同じく本能的というべき運動をも見せるが、面白いことに、生まれたての乳児の段階からその運動はすでにリズムに乗せられている。乳児の最初の能動的な行動は母乳の吸引だろうが、吸引は口腔内に陰圧をつくり、母乳の充満を待って、それを嚥下(えんか)するという三拍子のリズムを踏む。同時に乳児は両手を交互に動かして母親の乳房を圧迫するが、これはもっとも素朴な二拍子の運動だろう。二拍子と三拍子は基礎的でフヘン性(a)の高いリズムだから、成長する幼児の生活習慣の形成に大いに寄与するはずである。

仰臥して手足をばたつかせるさいには二拍子をとることが多いし、初めて立つとき、台につかまって、両膝を揃え、それを強く伸ばすという三拍子を刻むのが普通である。もちろん、二足歩行のような高度の習慣形成にはおとなの指導が不可欠だが、その指導が可能になるのも幼児の身体が運動のリズムを知っているからだといえる。本能から習慣へ、生理的肉体から文明的身体へという重大な移行が起こるとき、両者の仲立ちとなり、移行の軌道となるのは［　I　］なのである。

さらに巨視的に見たとき、人の肉体は誕生から死まで絶え間ない変化に曝(さら)されるが、文明的身体の変化ははっきりした識閾(しきいき)に区切られたリズムを刻む。文明圏によって具体的な年齢は違うが、成長、成熟、老化の節目を祝ったり慰める行事は世界中に見られる。また肉体的な変化はほとんど感じられないにもかかわらず、毎年の誕生日を記念する風習もフヘン的に定着している。身体というリズム単位の完結性がとくに高いのは、それがこうしてたえず現在を生涯のなかに位置づけ、あたかも藝術制作にも似て、

Ⅱ と有機的に結合しているからでもあるだろう。

ちなみに注意すべきは先にも触れたが、①この文明的な身体と生理的な肉体、いわゆる自然物としての肉体との特異な関係である。一面では肉体は身体の媒体にほかならず、身体の運動を伝動し、またそれに抵抗するという点では、海の波にたいする海水と同じ役割を負っている。肉体と身体が同一物ではないのは明らかであって、第一に イ が誕生と死によって外から統一されているのにたいして、ロ は習慣の持続力によって内から統一されている。また ハ が新しい習慣を身につけても、ニ の構造や機能は必ずしもそれに即応して変わることはない。

しかし他方、ホ は海水とは違ってそれ自体が個物であり、ヘ と一対一の関係を結ぶとともに、そのものとして固有のリズムを刻んで生きている。心拍とそれに繋がる循環器のリズム、咀嚼（そしゃく）から排泄（はいせつ）にいたる消化器のリズム、睡眠と覚醒を繰り返す脳神経のリズムなど、動物にも共通する自然のリズムが ト を貫いている。そしてこのリズムは疑いもなく、チ の同一性を形成するうえで重大な影響を及ぼすのであって、何よりも決定的な事実はいうまでもなく、肉体の死はそのまま身体の死に直結していることである。

にもかかわらず、人間が人間であるゆえんはこの現実を超えるところにあり、リ のリズムが ヌ のリズムに優越している点にあることは、論を俟（ま）たない。肉体はあくまでも文明的身体の指導を受け、新しいリズムをつくるばかりか、その構造さえ一定の範囲で変形することがある。前節で見た例でいえば、幼児が台に縋（すが）って立ちあがろうとするのは、骨格や筋肉がそれにふさわしく成長するからだが、そのまえに二足歩行という文明的身体の習慣があって、その影響が幼児を二足で立つ方向に誘導しているのは明らかだろう。

こうして文明的身体と生理的肉体とは相互に嵌入（かんにゅう）しあい、それぞれの固有のリズムを共鳴させあっていると見ることができる。むしろ二つのリズムが複合して新しいリズム単位を形成したとき、それが始めと終わりとを持ち、他人と区別される個人の生涯の誕生だといってもよい。後に詳説するが、じつはこの生涯にはさらに多様な外界のリズムが重なりあい、複雑多岐な複合体をつく

ることによって個人の個性が生まれるのである。

一般にリズムが他のリズムと共鳴しうること、現に共鳴しあっていることは広く知られている。航行する蒸気船は潮の干満のリズムに乗せられ、上下する波のリズム、前後左右する風のリズムに同調するとともに、船そのもののエンジンのリズムにも揺すられている。船が安全に航行しているとは、これらすべてのリズムが好調に共鳴しあい、一つの内なるリズムを合成しているということであって、それが崩れれば波も風もにわかに外なる障害となって船を脅かすのである。

これを身体運動に限って考えても、舞踊家が手と足を別のリズムで動かしながら、全身として一つのリズムを表現するのは珍しいことではない。もっと繊細なのはピアニストの指使いであって、両手の指が違うリズムを刻むのはもちろん、片手の人指し指と中指、親指と小指とが組になって、それぞれ異なるリズムを奏でることも普通だという。もちろんこれはただ異なるリズムを寄せ集めるということではなく、融合され統一されるべきリズムが予想され、あらかじめ藝術家の身体を突き動かしていることが前提だろう。

この共鳴の関係はさらに広く、身体とその環境のあいだに働いていて、身体の全行動を条件づけている。それどころか正確にはむしろこの関係が身体と環境とを区別し、②身体を相対的に独立させているとさえいえる。身体はあくまでもリズムの一単位にすぎないのだから、その完結性は強いとはいえ、絶対的な独立性を保持するわけではない。特定の身体と別の身体、自然的、文明的環境とそこに生きる身体との区別は、それぞれに働くリズムの異同によって決定されるのである。

たとえば同一の生理的肉体の内でも、瞳孔の反射的な拡縮などはリズムを持たず、身体行動と共鳴する可能性はありえないから、これは純粋な生理的肉体、身体外部に広がる物理的自然の一部だとしかいいようがない。逆に生理的肉体としては区別される他人の身体でも、ともに同じリズムで踊って完全な共感(empathy)が成立すれば、その瞬間だけは自他の相違はなくなったというべきだろう。一般に、身体の内部と外部を区切るのは固定的な外郭ではなく、リズムの共鳴の強弱という漸層的な変化だと考えられるのである。

そしてこの共鳴のかたちにも、逆に共鳴の欠如の姿にも千差万別の多様性があって、その違いのそれぞれがふたたび身体に帰っ

て刺戟を与える。この段階できわめて大雑把にいえば、この身体への刺戟の現れを常識は知覚と名づけ、認識のヨ[b]ケンと呼び慣わしているのだと、理解して大過ないであろう。

こうして身体をリズムの一単位として捉えるかぎり、③それが「今」「ここ」にあるということの意味は難しい話になる。一般的にいって、リズムは本来、いつどこにあるともいえない存在なのだから、それが物理的な時空のなかに位置づけられるには、それを伝える媒体の物質性によるほかはない。身体も生の流動のなかで特定の場所を占め、生涯という時間を保つためには生理的肉体の個体性を不可欠とする。喩えていえば、身体という漂う蒸気船は肉体を錨として、時空の大海の一点に留まることができるのである。

だが生理的肉体は刻々に変化するものであって、身体の同一性、「今」と「ここ」の持続を保証するものとしては十分ではない。何しろ生理学によれば、肉体の全身の細胞は数日ですべて入れ替わるというのだから、記憶といい習慣といい、およそ持続するものは［　Ⅲ　］のなかに成立するほかはない。記憶された経歴も身についた習慣も、それ自体がリズムの単位として、一定の幅を持つ時間帯を統一するのである。

しかしそうだとすると、この身体の「今」と「ここ」はたえず伸縮し、広がりの範囲を変える時空の単位だと考えざるをえない。じっさいその通りであって、行動する身体にとって、時空の精密度は行動の種類によってまったく異なってくる。航海士にとって「今」は日時と分単位で刻まれる時刻であり、「ここ」は経度と緯度で示される場所であるが、これがピアニストになると、「今」は数分の一秒を争う時間帯であり、「ここ」は鍵盤上の数ミリの違いが問われる空間となる。

そしてこの身体を包む環境の時間と空間もまた、けっして透明で均質的な単一の広がりではない。環境もそれ自体、やはりリズムを刻んで運動しているのであるから、それが身体の環境として関わるかぎり、そこに共鳴の現象が現れると考えるほかはない。時間も空間もこの共鳴現象の感触そのものであって、現象が起こる空虚な場所ではないのである。

時間についていえば、過去も未来も計測できる長さの彼方にあるわけではなく、身体の「今」を満たす感触として、いわばその新

鮮度として現れてくる。過去の経験が今も鮮烈であればあるほど、それは最近に起こったことになり、細部を忘却した程度に応じて昔に起こった経験へと変わる。未来もまた経験に向かう前のめりの姿勢の感触であり、それが強ければ未来は近くにあり、弱ければ遠くにあるという点で、過去と違わない。

一見、奇矯に響くようだが、身体は哲学のいう理性とは違って、飽きたり疲れたり忘れたりする存在だから、これが時間の遠近法(perspective)をつくりだすのは当然だろう。身体にとって時間は紡錘形をしており、現在から遠ざかるほど過去も未来も細くなっている。細くなるとは経験の細部が失われることであって、それが持つ多様な側面(aspect)が減少することである。現在の経験は言葉で語り尽くせない多様性を持つが、遠い過去や未来の経験はその細部が削りとられ、しだいに抽象的な観念に近づいて、はては履歴書や予定表のなかの一行にまで単純化されるのである。

広がりが単一でも均質的でもなく、それ自体が伸縮するという点では、空間も同じである。行動の「ここ」が行動の種類ごとに伸縮するのはすでに述べたが、一見、行動と無関係な環境としての空間もまた、随所に現れるごとに独特の表情を示し、直接に響く力で身体を揺さぶってくる。多くの人が、安全とわかっていても高所に登れば恐怖を覚えるし、狭すぎる空間に閉じ込められて恐怖に怯える人も少なくない。W・ヴォーリンガーのような美学者は「空間恐怖(horror vacui)」という感情を想定し、先史人が何もない空間そのものに不安を感じ、それを埋めようとして隙間ない装飾を施したと推察している。

何より忘れてはならないのは、人間の身体が行動するにあたって、空間はたんに開かれた可能性の場所ではなく、それ以上に超えるべき距離、克服すべき障害、疲れをもたらす負担であるという事実である。この意味での空間は、当然、行動する身体の活力の多少、裏返せば疲れの程度によって大きさを変える。

衰弱した老人にとっての百メートルの道のりは、元気な若者にとっての一キロメートルよりも長い。歩く一歩の歩幅も体力によって伸縮するし、反面、あまりにも短い歩幅は歩行の単位としての意味を失う。老人の一センチ単位の摺り足は歩行という質的な価値を失い、よろめきという別の範疇の行動に変わり、同時に彼の空間は人生の可能性から完全な障壁へと変質する。生きて現実に行動する身体にとっては、空間もまたたんなる量的な均質体ではなく、質的にまとまった Ⅳ の連鎖なのである。

＊文中に一部省略した箇所がある。

（山崎正和『リズムの哲学ノート』より）

問1　傍線部a、bと同じ漢字を用いた語を含むものを次の中からそれぞれ一つ選び、その番号をマークせよ。

a　フヘン

1　思想がヘンコウしている。
2　ヘンキョウを旅する。
3　見た目もヘンボウする。
4　ヘンゲンセックにこだわる。
5　イッペンやってごらん。

b　ヨケン

1　生活にヨユウがない。
2　ヨキンツウチョウがみつからない。
3　運転資金をタイヨする。
4　ヨダンを許さない状況。
5　キヨホウヘンは気にしない。

問2　空欄Ⅰを補うのにもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　歩行　2　変化　3　リズム　4　指導　5　運動　6　拍子

問3　空欄Ⅱを補うのにもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　現実を虚構へ　2　精神を物質へ　3　生理を習慣へ　4　部分を全体へ　5　直進を円環へ

問4　傍線部①の「特異な関係」の内容を説明せよ。ただし、次の文中の空欄1、2をそれぞれ十五字程度で補うことで答えよ。

［1］が複合することで、［2］が形成されるという関係。

問5　空欄イ～ヌに、次のいずれかを補いたい。それぞれ番号をマークせよ。

1　身体　　2　肉体

問6　傍線部②はどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　身体のリズムの完結性は同一の生理的肉体内でも一定せず、環境との融合で個人の身体が成立しているということ。

2　環境や他の身体とさまざまに共鳴しあう動きのなかに、リズム単位としての個の身体がとらえられるということ。

3　同じリズムで共鳴しあうことで、環境や他者の身体との間の隔たりが消え、リズムの統一が完成するということ。

4　藝術家の身体のリズムは絶対的でなく、共感の力によってリズムの共鳴のしかたも大きく変わっていくということ。

5　環境と複合する身体の個性は複雑多岐であって、外なるリズムはときに独立の障害にもなりうるということ。

問7　傍線部③は、なぜ「難しい」と言えるのか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　リズムは生理的肉体の物質性を媒介として、時空間の随時随所に位置づけられる現象であり、「今」「ここ」として固定するには伸縮し幅を持つリズム単位としての時間や空間を捕捉し、身体というリズム複合体のなかに位置づけなければならないから。

2　時空間というリズム単位を特定するには、それぞれに個体性をもった肉体による認識が持続することが必要であるが、肉体はその生理的機能の限界のために時空を精密にとらえることは簡単ではなく、「今」も「ここ」も一定しない広がりをもった範囲としてしか認識できないから。

3　それ自体がリズム複合体である身体が、持続するリズムと運動の広がりである環境の時間と空間をとらえるには、自らが主体として「今」「ここ」の範囲を計測できる遠近法が不可欠であり、それによって多様なリズムの共鳴しあう場所として認識するものだから。

4　リズム複合体である身体において知覚される単位としての時空間は、たえず伸縮し広がりの範囲を変えるリズム単位でしかありえず、外部の時空間もまた均質でも単一でもないリズムの複合であって、「今」「ここ」とは両者の多様な共鳴の現象だから。

5　生理的肉体は身体の同一性を保証しないため経験としての記憶や習慣は変化しつづけ、環境はまた透明でも均質でもない空虚な場所を満たす感触として認識されるので、身体にとっては「今」も「ここ」もリズム単位としては不安定だから。

問8　空欄Ⅲを補うのにもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　生理的肉体の行動の共鳴
2　身体というリズムの複合体
3　細胞間での情報伝達
4　「今」と「ここ」の統合が生むリズム
5　物質としての媒体の伸縮

問9　空欄Ⅳを補うのにもっとも適切な語を、傍線部①より前の文中から抜き出せ。

(二)

次のⅠは『万葉集』に「高橋虫麻呂の歌集」の歌とあり、下総国葛飾の真間(千葉県市川市)に住んでいた伝説の美女、真間の手児名(女)を詠んだ長歌である。Ⅱは、Ⅰを題材として書かれた江戸時代中期の代表的な怪異小説の一節である。真間の里に住む勝四郎は、上京して七年後に家に戻ると、妻の宮木は泣いて迎えてくれた。しかし、それは妻の亡霊であった。勝四郎が悲しみの中で、妻を弔った老人から話を聞く場面がⅡである。ⅠとⅡを読んで、後の問に答えよ。

Ⅰ　葛飾の真間の娘子を詠む歌一首

①鶏が鳴く　東の国に　a古に　ありけることと　今までに　絶えず言ひける　葛飾の　真間の手児名が　麻衣に　青衿着け
〔注1〕ひたさ麻を　裳には織り着て　髪だにも　掻きは梳らず　沓をだに　はかず行けども　錦綾の　中に包める　②斎ひ児も
妹に及かめや　望月の　足れる面わに　花のごと　笑みて立てれば　③夏虫の　火に入るがごと　湊入りに　船漕ぐごとく
行きかぐれ　④人の言ふ時　いくばくも　生けらぬものを　なにすとか　⑤身をたな知りて　波の音の　騒く湊の　奥つ城に
妹が臥やせる　遠き代に　ありけることを　昨日しも　見けむがごとも　思ほゆるかも

Ⅱ　寝られぬままに翁かたりていふ。翁が祖父の其の祖父すらも生れぬはるかの往古の事よ。此の郷に真間の手児女といふいと美しき娘子ありけり。家貧しければ身には麻衣に青衿つけて、髪だも梳らず、履だも穿ずてあれど、面は望の夜の月のごと、笑ば花の艶ふが如、綾錦に裹める京女孺にも勝りたれとて、この里人はもとより、京のb防人等、国の隣の人までも、ことをよせて恋ひ慕ばざるはなかりしを、手児女物うき事に思ひ沈みつつ、おほくの人の心に報ひすとて、此の浦回の波に身を投しことを、世の哀れなる例とて、古の人は歌にもよみ給ひてかたり伝へしを、翁が稚かりしときに、母のおもしろく話り給ふをさへいと哀れなることに聞きしを、⑥此の亡人の心は昔の手児女がをさなき心に幾らをかまさりて悲しかりけんと、かたるかたる涙さしぐみてとどめかぬるぞ、老は物えこらへぬなりけり。勝四郎が悲しみはいふべくもなし。

注〔1〕ひたさ麻――麻だけの繊維。
〔2〕奥つ城――墓所。

問1　傍線a、bの読みをそれぞれ平仮名四字で書け。歴史的仮名遣が必要な箇所はそれを用いよ。

問2　傍線①のような、通常五音からなる和歌の修辞を何と言うか。漢字二字で書け。

問3　傍線②の口語訳としてもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　うつくしいと思われている子もその嫁に勝てるだろうか。
2　家の中で守っている子もその嫁に及ぶだろうか。
3　大切に育てている子もこの娘にかなうだろうか。
4　神聖な子もこの娘と同列に見なされるだろうか。

問4　傍線③は手児名のもとに男たちが寄り集まってくる様子を比喩しているが、Ⅱではいかに多くの男たちが集まってきたかということを書いている。その部分を二十字以上二十五字以内で抜き出し、最初と最後の三字を書け。ただし、最後の三字は句点または読点を含めて書け。（句読点は一字と数える。以下同じ）

問5　傍線④で、男たちはなぜ手児名に言葉をかけてくるのか。その理由についてⅡで説明している部分がある。その部分を十字以上十五字以内で抜き出し、最初と最後の三字を書け。ただし、最後の三字は終止形に直して書け。

問6　傍線⑤は「身の上を悟って」の意味として理解できるが、Ⅱではそれを手児女のどのような心情として書いているか。もっとも適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　憂鬱
2　諦念
3　達観
4　哀歓
5　杞憂

問7　傍線⑥の解釈としてもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　この亡くなった宮木さまの気遣いの心は、昔の手児女の子供じみた心にわずかばかり通じていて
2　この亡くなった宮木さまの律儀な心は、昔の手児女の誠実で純粋な心に比べてもはるかに優れていて
3　この亡くなった奥方さまのひたむきな心遣いは、昔の手児女の無垢で幼稚な心よりもひときわ秀でていて
4　この亡くなった奥方さまの夫への思いは、昔の手児女の一途な心にいくらか似ていて

問8　Ⅱの作者名を次のA群から、作品名をB群から一つ選び、その番号をマークせよ。

A群　1　滝沢馬琴　2　近松門左衛門　3　鶴屋南北　4　上田秋成　5　式亭三馬　6　井原西鶴

B群　1　浮世床　2　雨月物語　3　世間胸算用　4　椿説弓張月　5　東海道四谷怪談　6　曾根崎心中